

詩歌連俳
季寄註解

改正月令博物筌
秋之部

改正月令博物筌 九例

○此書の先小行目目原先生述

作の歳時の増補して洞齋公初三十

年前編輯一諸先生の訂正を

乞て春之部夏之部既ふ世小瀧

布ととつるも艸稿駁雜ふして傳

寫の誤もあり且時務小後を事

少を いんじん 神あふけ 於ろく 洛

東の新日吉四月の祭祀五月と

改あら けれ 八幡やわた の安居頭やすかづち 今十二月

小のお 行ゆ 行ゆ 其外そのほか 歳事としごと の故事ことば 又また

世俗せきよ のいい んん むむ 一ひと せせ の内うち の嘉例よきことば

るどつる物もの 小ち 變か 更へ 事こと 多おほ

今般委いまはんい 一ひと 改正あらため 一ひと 口くち 録ろく とと



此の諸家の校閲を経て板行
 故に改正の二字と蒙らるる春夏
 の部も此度正しく是又改正の
 二字と附と依て改正月令博物
 筌とつるりの宛めて正しく誤は
 此各の正しくつるりと答あひて
 詩奇 賦 諧 寺 終 記 故 記 一 ゆる
 ○春夏の部の神社祭礼細字小
 各各分れあれども秋冬の部に至
 ていさろふと然礼入世ふろく聞
 へる皆大字小書と付の見
 易かりんが為なり
 ○巻毎の初小圓形の内小各
 ろの見易かりん為ふ設せよと云

七月部目録

△印ハ俳諧の
季とりり物也

○養生の法。雨風の考。米の豊
 妙茶。季とりり祭。其外人家
 重宝のこゝ処々小教多あり
 少目録よとれとあるます

秋

○秋の旺とる也。秋曲表
○秋の異名并註解

七月

卦 月支 調子 陰陽生
並註 七月異名並註

立秋節

△處暑中

日令

七月一日の定り
より事定り定り

先天節

△洗車雨

硯洗

△山北野煤拂

七日節供

△索餅

洒波雨

異名
詩奇

△二星△星合△曬衣△七夕△乞巧
 △星夕△星會△乞巧奠△犬飼星
 △男七夕△女七夕△七夕七種△七夕一妻
 △七箇池△百々池△乞巧針△七夕

△此の赤△星の手向△度の立敷△七夕の
僧△水△舟△舟△握の葉△星契△星
迎△年の渡り△妻ひ久舟△妻こ
一舟△七種舟△天の川。異名和名
△秋さう衣△紅葉のそー
△いささぎのそー

○七夕之と 七丁
△七夕之と 七丁
△七夕之と 七丁

△池坊立花 七丁
△逆峯入 七丁

△本願寺菟花 七丁
△都文 七丁

△模賣△迎鐘 七丁
△魂迎△迎火 七丁

△盃蘭盆 △盆會 △盆供 七丁
△盃祭 △聖霊祭 △聖霊棚 △聖霊棚 七丁

△前尾草 △水舟中 七丁
△生身玉 △荷の飯 七丁

△解夏 △夏各納 七丁
△解夏 七丁

△差精 七丁
△墓祭 七丁

△施火 △大文字火 △妙去火 七丁
△送火 七丁

△水灯會 七丁
△舟形火 七丁

△飲戸祭 七丁
△松崎題目踊 七丁

△つと入 七丁
△鷹峙出 七丁

△京御灵神出 七丁
△宗祇忌 七丁

△文覚 △人見 七丁
△愛宕火 七丁

△信州御射山穂家作御神事 七丁
△夜山別 七丁

△月令 七丁
△燈籠 △高燈籠 七丁

△撰待 △門茶 七丁
△花 △折 七丁

△踊 △花火 七丁

△踊 △花火 七丁

△踊 △花火 七丁

△踊 △花火 七丁

△踊 △花火 七丁

△踊 △花火 七丁

△踊 △花火 七丁

△踊 △花火 七丁

△秋の扇 △扇おく △團あく △扇さる △團さる

△都六斎念佛 △相撲節會

△こころ使 △さくく角力 △とまふ △過ぎとまふ

時令 この部は七月一ヶ月時候

△初秋 野

△残暑 七無四

△稲妻 七

△秋の初風 七

△初嵐 △暮風 △冷

△楓 △静 △椒

△柞 △榎

△榎 △木槿

△朝負 △秋海棠

△玄及 △桔梗

△沢桔梗 △蘭

△建蘭 △女郎花

△茶の花 △仙翁花

△観音草 △翁草

△弟切草 △益母草

△鳳仙花 △旋覆花

△野菊 △やぶ花

△曼珠沙花 △常山花

△頰桐 △蓖麻子

△洗柿 △若荷花

△爵金花 △薏苡

△蒲萄 △紫葛

△桃子 △木瓜実

△槐花 野寺 △蓮子飛 野寺

△刀豆 野寺 △夕白実 野寺

△青瓢箪 野寺 △西瓜 野寺

△のこゝ 野寺 △束 野寺

△粟の穂 野寺 △榴葉の雲 野寺

△稻の花 野寺 △早稻 野寺

△室の早稻 野寺

生類 七月の生ものと集むる(四)この
ころの八月又九月にも用ゆる物

△初鷹 野寺 △小たり狩 野寺

△の打 野寺 △荒巻 野寺

△鳥屋勝 野寺 △鳩吹 野寺

△秋の蛙 野寺 △秋の蠅 野寺

△秋の蚊 野寺 △秋の螢 野寺

△秋の蟬 野寺 △蛸螻 野寺

△第蛸 野寺 △秋のてん 野寺

△田畑虫送 野寺 △蜻蛉 野寺

△赤卒 野寺 △虫の音 野寺

△赤んぼ 野寺 △虫の声 野寺

△虫撰 野寺 △虫合 野寺

△虫尽 野寺 △虫籠 野寺

△虫賣 野寺 △響虫 野寺

△月鈴虫 野寺 △松虫 野寺

△蟋蟀 野寺 △促織 野寺

△蛸蟹 野寺 △龜馬 野寺

△稻虫 野寺 △阜冬虫 野寺

△樵虫 野寺 △藁虫鳴 野寺

△馬追虫 野寺 △縮つこ 野寺

△藻鳴虫 野寺 △蚯蚓鳴 野寺

△蟪蛄 野寺 △常山虫 野寺

必用

七月一ヶ月。養生。天。衣。服の式等。要用の。

樂事

破軍向方

時刻

方角

天氣占候

衣服の式

菽かき
花きき

女の衣服

養生

飲食

七月一ヶ月の食物一切
料理するに準ず

燒采

至丁△切麥
△ある麦 至丁
△ある麦 至丁

七月料理献立

七料
二丁

月令博物笭秋之部發端



秋由来

漢書律曆志曰秋の聲
なり物孳斂して成熟

礼記の直曰秋と小
陰、今其氣成
月四陰、至れり
陰とて、盛
陽とて、盛
さるる、以て
秋、寺人陽也
る、陰とて、盛
とて、若し、付この
以て、秋、養生、を
とて、以て、特令、

礼記の直曰秋と小
陰、今其氣成
月四陰、至れり
陰とて、盛
陽とて、盛
さるる、以て
秋、寺人陽也
る、陰とて、盛
とて、若し、付この
以て、秋、養生、を
とて、以て、特令、

秋、也、とて、孳斂、いささ、あ
る、義、なり、和語、ふあ、れ、訛
る、事、去つて、天色、さ、え、あ
ら、る、事、と、いふ、こと、なり、又、一、説、ハ
鮮、る、心、を、草木、の、葉、ハ、あ
ら、る、木、の、実、も、色、づ、く、ゆ、へ、と、つ、り
○方、と、西、と、する、事、ハ、礼記、ハ、
秋、を、西、郊、ハ、む、ら、り、と、す、り、

統圖は日西方の白道をゆく
これと西陸とつくと見えたり

和歌は秋の方角を西とよみ
しる例は古今集藤原勝臣
の歌なり

哥はきむとてはあつらふ
西より秋のそとをりこれ
とよみたり ○ 稽は白虎とい淮南

子も西方の金なりその獸は白虎
とあり ○ 人の義なり 淮南子

小秋と非とす年ハ万物とたを
ゆふなり 義ハ成なり成ハ方は

て物の角ありかちらひて人ハ於て
ハ義のあり心なり ○ 天ハ夏天

元帝纂要ハ天ハ夏天とつて有
て註ハ是ハ怒なり万物の彫零と

そまはまはつるハ怒むと見
えたり ○ 卦ハ兌ハ易ハ兌ハ三秋

也とあるふとあり ○ 氣ハ小陰ハ
目の上 ○ 臟ハ肺ハ人身の肺を

五臟の花蓋とて上居ハ金ハ属
とあり故ハ秋ハ配當とあり 医谷

小見たり ○ 色ハ白とい礼記ハ其
帝ハ少皞とありて註ハ少皞ハ白牝の

君金天氏と見えたり ○ 味ハ辛
とハ礼記ハ其味ハ辛ハ其臭ハ腥

と有て註ハ辛腥ハ金ハ属
とありと見えたり

秋異名 白藏 素商 穽斂
○ 素商 ○ 素商 ○ 穽斂

五政 木落 陸中 金斂
○ 西灑 ○ 五行 ○ 土感 ○ 菊時

○ 葍秋 ○ 爽籟 ○ 少皞 ○ 收成
○ 金商 ○ 朗景 ○ 明景

異名言 白藏といハ白ハ秋の金
色藏ハ收藏ハ爾雅出

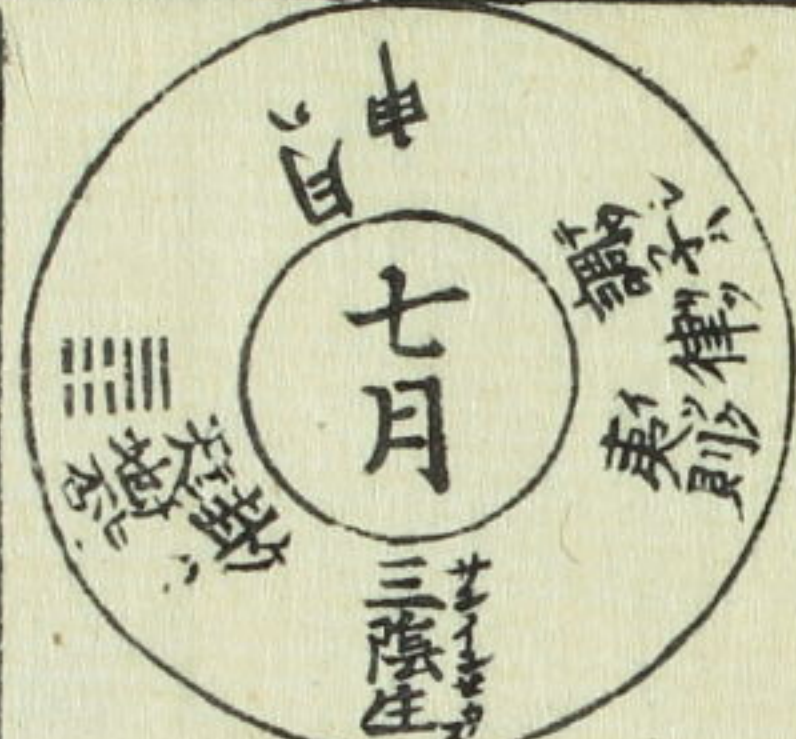
○ 素商ハ云ハ素も白ハ商ハ秋の律
なり ○ 素秋ハ此理ハ元帝纂要出

○ 穽斂ハむらさきハ金ハ穽斂
徳在金ハ月令ハあり ○ 短晷ハ日

〇日陰之〇商應之潘安仁詩出
 〇五政の管子出一曰博塞と禁と二
 曰五兵の双と見る事みん三日旅
 農と慎と聚收と趨せよ四曰缺
 たりと補ひ折らば塞げ五日墻垣
 を修よ六曰居を周せよ已上五政之
 〇木落の木葉落ると楚辭出〇陰
 中へ前漢各律曆志有〇金勁の呉淑
 が秋賦の金氣方勁とあり〇西漢
 の前漢各郊祀志出あり〇行徳
 さく小行たるあり〇士感の太
 夫秋の感どくり諺あり〇
 菊時の時とさきあり〇葶収のあ
 つまあり〇秋の聲あり〇少皞の秋の帝を配す
 已上元帝纂要あり〇収成のれと
 りあり〇金商の金は秋の徳商の秋
 あり〇朗景の明景は秋の景色
 〇右の外秋三月の外渡る季の物
 へ別ふ三秋の部あり

七月之部

△此印の分是と俳諧
 の季寄ふ用ひ来る物



三陰生ると秋
 の陰の初より故
 の孟秋不於天
 地初とて肅と
 して肅のの
 ちまろ心身を
 清しむる月

〇律を夷則とくは夷は傷之万物
 始て傷を天刑とくはゆる前漢各出
 〇卦の天地否とくは夏の三陽
 上あり秋の三陰下ふあり象

七月
 △孟秋 礼記出 △上秋 韻府出
 △季秋 纂要 △首秋 韻府

△新秋 韻府 △早秋 同 △蘭秋 事物異
 △開秋 同 △蘭景 同 △相月 △孟

商 同 △夷則月 同 △湘月 留青朱珍
 △蘭月 同 △相秋 同 △秋初 同 △商

節 韻府 △爽節 同 流火 同 △初
 秋 纂要 △盆秋 △涼月 同 各出

和 △文月 奥義抄 △六月 同 莫得抄
名 月 秘藏抄 七月 莫得抄

△おとろけ月 藏玉 七夕月 同
ふとろけ月 同 八月 莫得抄

異註 △孟秋の孟の下のり云
字もろけ月 △上秋の三秋

の中 七月の上下なる月あり
△肇秋の肇の下のり云義あり

△蘭秋 楚辭 秋蘭と紐て佩と
こと ありていふなり

△開秋 開のひくくと云義とて
と下 免て秋あり月といふ心入

△蘭景 これも楚辭の秋景の故
△首秋の首の下のり云義あり

△孟商 孟の初の心商の秋の義入
△湘月 これも楚辭の此月湘君と

いふありていふなり
湘君の舜帝の后なり

△夷則 月夷則の律の名入 只註あり
△盆秋 此月孟蘭盆會とありゆへ

△涼月 礼記月令 孟秋の月涼
風至とありていふなり

和註 七月の七夕の借とて色
々の文もひひくくゆへ文

ひき月といふを畧して文月とも云
月といふんとぞ 奥義抄 出

○五月といふ月と約きていふなり
○七月の月と牽牛織女とをが

ひふ愛あり月といふなりあり
○七月の月といふ七夕の月あり

△とみまへ月 下ふあり守奇にて
そのころはまびらふ見えたり

○ふとろけ月といふ七夕ふかし
とて昏物をもちくをころたり

○あさき月といふ秋の初を約して云
⑤ 秘藏 七月の月

七夕の月といふ月ありては
いふふのうれいなり

藏玉 七夕月 家隆
影のそりたる様もころ下り

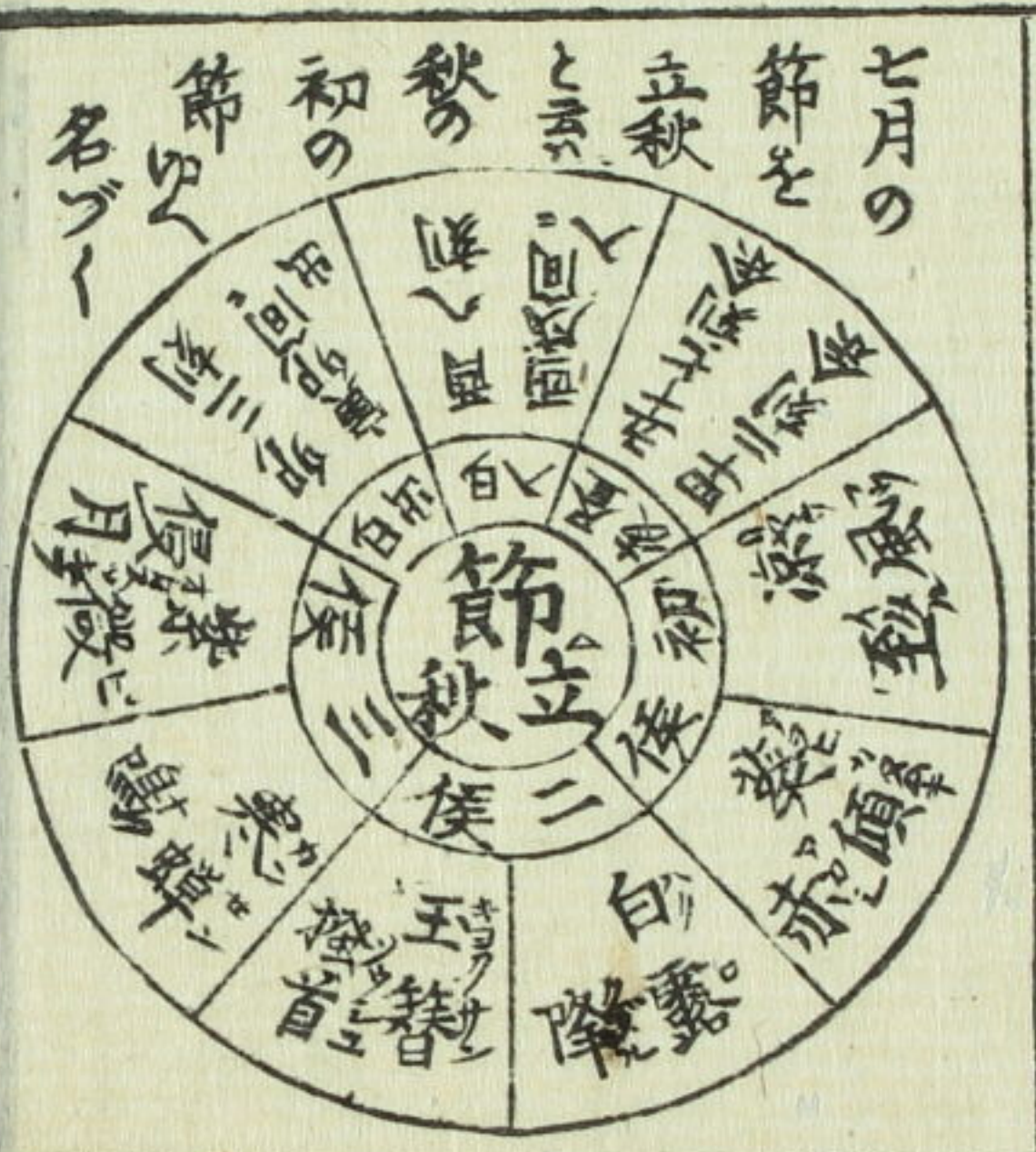
七月 節 七ノ二
七夕月のころまちろる

七夕のまふ夜けをのひあそきて
つとむくへる久ひき月

莫傳 採初月
月あつらふとらむねらひ乃
秋の初月とわらふより

藏玉 ともえく月
七夕のあつらひをふそくくや
多とえくともえく月

立秋 節の名〇七十二候〇草木七十二候〇
昼夜長短〇日の出入等左記と



〇涼風至 天地の仁氣散ると殺伐の氣ふらむるの候もわらひて赤くはれり

〇白露降 秋の陰氣夏の陽氣が来ると氣候まづるよと礼記の註小見そる

〇王薔花 催とくは首を擡くよ寒蟬鳴と暑中小生しと蟬の聲の變とらといふなり

〇紫微月と侵とくは紫微星とつちり九位乃月ふらふくとれすとつちり

立秋 七月の節と然とる和

〇初秋の秋立て三五日たるとよむべしとれ候の時令の死なあると初秋の趣ふり立秋の心とよむなり

夫木 立秋 定家

夕風吹く秋の空を山あり
清くひびく風の音あり

夫木 後善教院

秋風吹く夕陽を山あり
清くひびく風の音あり

龜山 立秋朝 御製

夕風吹く秋の空を山あり
清くひびく風の音あり

千首 立秋風 為尹

夕風吹く秋の空を山あり
清くひびく風の音あり

同 立秋曉 師繼

夕風吹く秋の空を山あり
清くひびく風の音あり

千載 社頭立秋 重政

夕風吹く秋の空を山あり
清くひびく風の音あり

同 △夕風の秋。あつたをむる

夕風吹く秋の空を山あり
清くひびく風の音あり

△秋の暮る△夕風の秋。秋の夕風
○まきて。今夕の夕風をむる

連 夕風吹く秋の空を山あり

夕風吹く秋の空を山あり

非 甚く夕風吹く秋の空を山あり

溪谷の夕風吹く秋の空を山あり

詩 立秋五字對句 同上

好雨天邊落 金井落梧桐

新秋水様清 涼生一枕風

詩 立秋七字對句

秋暑困人仍 御扇爽氣涼

晚風生竹却 添衣入清商

迎秋日色 簷前見 望白雲

ワクルト云故事ト叫ニルル淮南子ノ一葉落テ天下ミナ秋ナリ

トイフ事トヲトリアハセテ季トシタルモノナリ

○**分** 廣沢の長考ヲ七夕のちヨ
天の川星はくやしの埃風又
らるゝ一葉のつるじくふ

非 協の糸と造る糸や登舟直正

立秋 **柳散** 此ゴロチリソムル故
故夏 柳桐ノ類ハ早クチ

リ初ルナリ。○事文類聚ニ晋ノ
顔愷之ガ詩ニ蒲柳之質望

秋先零ト云フ語ヲイダセリ
コノ故事ニヨリタル詞ナリ

立秋 **一葉衣** 是ハロノ一葉ノ故
故夏 事ニ一重ノ衣ヲ

取アハヒタルモノナリ
○右一葉の事よりつゞきも立秋

一日ふかざりくくもあはれ初
秋の事によるとも然るべし

立秋 天氣

立秋よりほくきて東
北方風をそむゆ

縮み実入ら守。○又蒸あけのれ
秋収と後一ツツバ。○夜ひや

なれ大風な。○これを夜北と
よかり昼あめく残暑つと

夜くれてとこ。○夜北吹や
ほひて日和よく虫けさく縮

み大さけより。○南風にくみめた
あけさの雨ふる。○秋季はくも

みり。○多く出ても風出ざ
まのあまふさく。○朝どく

ひぐれ方赫々とわくやけ
まの陽氣のさうんさるる幸

へ赤くみれはほひて日和は
○朝天雲のやけふ。○二三日の

ら小雨ふる。○夕やけ北へま
。○もよりより南へま。○雨

ありさやく消るも又雨か
○朝の虹の西よ見。○三日の内

見そり 本朝新嘗會は是ふより
○菱花内実ふもしれ実てなるなり

日令

此部小の七月一ヶ月日の定り
たつと支の定り方とを記す

朔 今日風雨あれり米の價貴
日 ○南風あれり米粟大ふり

先天節

今日聖祖降誕の日
依て名づく 事物異名集出

朔 江 本所羅漢寺五百羅漢
日 戸 供養施餓鬼あり

朔 信 下諏訪明神秋の宮祭り
日 濃 委くハ年中行司細目小出す

三 京 鳥羽院御證月御忌今日
日 都 竹田村安樂壽院にて行り

四 伊 栢流一の神事 栢古も云
日 勢 昔ハ土貢島より栢と捧

げり 神事ハ風の宮にて行り
る 栢の浮んで流る時をその

年豊年 栢のまふもくると
るハ凶年

○あつとくは方のかかへ
あつとくはあつとくを寂阿

五 京 建仁寺開山忌 諱ハ栄
日 都 西千光國師葉上坊僧正と云

六 高臺寺施餓鬼什物出 四条
日 二 条河原七夕手向の笹流

六 洗車雨 六日小降る雨とつる
日 七 夕の車を洗ふと云

事ありとそ 歳時雜記見たり
又日本歳時記小見委りくある可

六 硯洗 机洗 京師の兒女令
日 硯 机と洗ひ清き手

の葉の露とつる梶の葉と七夕
の手向の詩哥と各々供とるく

六 山 北野天神の社令
日 城 北野煤拂 日内陣小納めある

神室と外へ出て虫干と其間
内外の陣の煤とるひとる可

○諸谷北野御手水六日とる
煤とるひ七日とるハ誤り

七〇西南の風と金風とつみ米日実少し〇雨予れば八月小洪水あり但し小麥麻豆のふ價やとらへしぜ

七日節供 今日内膳司より當日の節の供御

を載せとて供御の毎日奉る物もれとも一年の内節々々奉る節供といふる

〇七の心陽不變の数をり故に當七日の本朝五節句の一に祝ふこと日本紀江次第公事

根源等其外諸君亦出て然る式日あり俗二星の祭を忘るるふ似たり

昔高辛氏の小子今日索餅 死す天鬼とるり人を

とるりてこの索餅と供して瘧疾を治すといふ

とまらうとらう十節紀の出り今日の節句の瘧と除く為也と

ソウ此ゆりや今日親族索餅とれり又索餅と食ふり

索餅とら索餅のこりり索餅とら風俗考に出り

生花式 撫子桔梗 菫 萩 葛尾花 ともえい

七 洒淡雨 七夕の雨といふ牽牛と織女と別とを

悲しとてあみごをそをその雨あつたり 唐土にてぬくといふ

ふりたりたり 黍くハ 事文類聚天中記等に出り

七 七夕 二星 星合 織衣 巧女 乞願 夕星 星會 乞巧奠

△男七夕異名 牽牛 星経 河鼓 赤雅 牛郎 子平 大全 牛星 晋公 淡緑

同和名 △彦星 和名抄 △犬飼星 月

七月 日合
牛ひく月一歌林抄△男七女

△女々異名 織女星 經天孫 柳文

星娥 詩学大成 天娥 宋詩選

天娥 同上 △女七女

同和名 なるつづり 夏集 △とりつづ

○七夕七姫とくつひ

△朝貞姫 △梶の葉姫 △百子姫

△薰物姫 △うぶ姫 △秋露姫

△糸織姫 已上を七夕乃七姫と

つひをり 草に出たり

○又七夕七姫の一説は。桂姫。梶

の葉姫。秋天姫。琴寄姫。灯姫

○糸織姫。篠蛉姫 已上和中集の説

○證哥ハ名数和哥選とつる昏

不出るゆへ畧之右名数和哥選ハ号

と多くあつた哥のこゝ後とい

繪ふあつたよきころりてし秘

受口傳てのころ故初学の人を

見て大方便ふあつた昏なり

○七夕祭と乞巧奠といふ乞巧ハ

たんとよして女の手よこの器用

あつたよに乞ひいひの事あつ奠

いふころとよ心字あり日本とい

天平勝宝七年小禁裏にて初

て行り先御殿の前ふ白木の几

と立て立琴とて十三絃の箏と

呂し律の調子小合して挫とそ

瓜菓の類とあつた竿のちり五

色の糸とけつねならぬ水と

たへて二星の影とつた香花

ともともへ祭らるるよ江家

次第にも委しく記されり

○唐土小も此夕ハ婦人あつまつて

五線の糸と以て星の影小むら

て七ツの針のこゝろとて一奠と

瓜とよのこゝろとて巧と乞祈

小蜘蛛がたれとあつたさりの

上るさぐることつたけいけいひの

よあつとすよ 荆楚歳時記見り

○今世今日兒女子竹の枝小短尺と

片づい和哥と手向まのいほて和
國の風之竹の草小糸とつて初意

とり妻 逢ふことの支いさゆ
名づかるごとく又万葉

○やらのせの体の中へう 支備
人あうれりり若んこあへい人丸

又灯火炬もいひさう 證哥名
教和哥選不出

○故事詩哥次ふかづく 出す尚
又天の川ハ川さかへりく 小星の

あつまうさうさけ七夕の由來
其外和漢の故事詩哥等委

しく日本歳時記又ハ銀河抄
等不出すたりりさうさう

七箇池 △百箇池も○セツの
鹽水とつて星の

影さういさゆふ
○新古今 長家

夫木 右京大夫
つらやかニツれりーの物さう

たういのみふさうさうさう
俳 聖人の繫糸あや妹脊山 因元

乞巧針 婦人七孔の針小色々
の糸をさとして七

夕またむさうさう
○千五百番哥合

あひもてもねり末の契うさや
活いさうさうさうさうの糸

占蛛絲 婦人瓜 茄子等と供へ
祭に次日早瓜の上

と得さうさうさう
と蜘蛛葉といさうさうさう

願の絲 五色の糸と竹の糸
かちて手向さう

詩 願絲七字對句 詩礎

虚無天上支機石 昔張勳ト云人がイカタニの天ノ
川ハイテト云女ノ多ヲモリ石ヲモラテ
トラトラストキ

七月一日令
信有人間乞巧線
願線針

人間世界テヨロコビノイトニハリテ
ヲシテ婦人がオモヒクニキヨウニナリ
タイト思フイハニコトニ今モ元ナリヤ
チカイノイハ
チカヒニ三元

星は手向
燭火其外何ても
今日星は供する物と云

夫木
常盤井入道

向者のおれをこそもの手向して
庭にかけたる秋のさびしい

庭の立琴
夫木七夕のあめ
夜は庭ふそく琴の

あさりのむくいさひのいと 寂蓮
非 立琴やあはにまじり 京屋菊乙

七夕ふ借
惣と七夕供する物
をわすといふ中にも

いそいで衣でッ布もくして是
とも手向一かたり

後撰 せむらふをうけしをうけし
七夕つめふくともものつ なる 慈圓

水掛草
貞徳の説より水影
草は多くい七夕は

よりの水掛草も 稲のくさか
稲の水影のくさくさの故水影
草と号く尚又盆の處ふも記と

延文百首
賢俊

七夕乃結へ繋り 八あ方の川
あさるあまの露もろりし

梶の葉
七夕ふハ七枚の梶乃
葉ふ手向の歌とか

五色の糸にてまいて屋の上
小あびをくものさるは 中院通
茂公の御詠より 漢要同巻三出

夫木
入道前大政大臣

かきほくる梶の七葉よあふこと
ねあまより たる秋のゆへくれ

新古今
七夕のともろの秋の梶乃葉よ
いく秋うれたつあつと 俊成

連 梶よりまはるあふあふ
非 梶の葉をまはるあふあふ

狂 梶の葉をまはるあふあふ
そのいもみみみみみみみみみ

○一説小楳子ていさく楳子て紙を造る木の葉ふ哥とかくたり

星契 牽牛と織女と年々今宵の逢瀬と契約と心こ

△草庵 けり中も吹く入るは風と吹くはたの心星合のそと頭阿

星迎 織女牽牛とまらむくふる夜と心さる

△一年一度天の川と渡ると牛女の

逢ふとらゆへにや一乃ここてとて哥にもよあり

△続拾 色流いらふは海うるも隆康

妻迎舟 織女が牽牛とひみふ出る舟と心さる

△白川百首 頭朝

△非 月も多るらるる舟のよと女と女と星の契より此知るとい哥の詞

妻に船 牽牛乃果てて来る舟といふころく

△非 日も多るらるる舟のよと女と女と星の契より此知るとい哥の詞

七種の舟 草花を舟とわごる七々と祭るあり

△秋 あさくち尾花葛女郎花ふらふらぬ撫子これと秋の七種と云

秋さる衣 彦星の着てこるさるのさるあり

△万葉 七々のいほとてまてお布のねまらこまらうれうさるらん

△夫 七々のいほとてまてお布のねまらこまらうれうさるらん

天河 銀漢 韻府 天漢 同 異名 星河 詩学大成 明河 古文

△天潢 梁何遜詩 銀漢 雞跖集 雲漢 唐詩記

△和名 河まの川 今あまのかんり日 ちと川 星玉 星のやとりり 四季物語

新勅 後二条院

心あはれ川流さるる天の川

あかてまの宮の秋の夕暮

連波まはれやうせ天の川宗祇

俳七つふ回ひ流れつ天の河桂林

むす葉ふくくして細くしての河瑠洲

あかひとくまてぬ一紙の起渡

涼もの芬流とやまれば河半雪

狂きかてつひさ浪うらを天の河

玉のさるまはり合の穴 紫若

詩 銀河詞 杜甫

常時任顯晦秋至最分明

云モノハツ子ニ見エタリ見エナシタリシテ

モ氣ノツカヌモノビヤカアキニナルトキツウ

アキラカニ 縦被微雲掩終能永

ニ見エル 夜清 カンアノカハガムラ雲ニオホハレ

ト見 會星動雙闕伴月落

邊城 フクニテハキリノオニナカメ

ナリ月カゲニツレテハ辺鄙 牛女年々

ノ地ニモ見エワタルトメ

渡何曾風浪生 年ヲ天介ヲワタレ下界

川トチカフユニ風ヤオモノオコルノハアルマイ

紅葉の橋 次又註あり 頗阿

今旧いよも雨ふさつしてこれ河

くれる舟くくるまゝやうらん

鳥鵲の橋 かさねのよりハ乃

△ 橋 織女ハ天帝

の女牽牛と夫とて後機を

みりて瓜ねこころゆへ天帝怒

つて其中でさけ河をるるて

住しむ七夕ふ一度會事とゆらす

鳥鵲この橋とかりて織女を

越えむらむらとつりころるを

とあはれこの橋かつらして紅

涙と落すこれふよらして紅葉の

橋ももよみこれふ俗識とて

信用とるふたすもふ博物

荃小弁とのかきださるわ

とれ種類たり

⑧ 夫木

俊成

七夕のきえぬ契うと流んまや
こひのけりしあふかさねのたし

⑨ 雨後 かくたやとあせの橋もを基角
七夕の歌詩連俳 いかづく

⑩ 六百番奇合 家隆

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
よやまぬらん星合のそと

夫木 為家

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
かこやふく川を星合のそと

永久百首 七夕後朝 兼昌

朝風が川波さりけ一粒つち
きぬゆらふもまよとぬんく

家集 海路七夕 経信

星合の彩風うらまゐるこの海も
天の川流のこらちととれ

新續古 待七夕 洞院攝政前左大臣

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

續古 七夕別 家隆

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

あふくたの庭のとりひろくまえぬ
あふくたの庭のとりひろくまえぬ

星合のうづらふかこそ宗敬
 ①七夕かきひいし芭蕉
 粉や丸まの上りての川晋子
 及らぬ古方て流るる星条十
 浮巻のうらまゝ才磨
 文りや花世もあふ天の川露橋
 朔夜りあうて星の別二柳
 先々合ふ星を幾世もあふ立圃
 星合のかさねをや飯と汁移竹
 志知く秋の七葉やまゆ貞佐
 ②狂 分厚くしてを吳あふ七夕又
 むら河原のたれ川雄長老
 七夕ふあふし夜あふれと
 かゝます経ふわくく由縁

詩 七夕五字對句

同上

卷幔天河入

故鄉臨桂水

開窓月露微

今夜明星河

詩 七夕七字對句

詩 礎

月渡天河光轉濕

懷良宵

鵲驚秋樹葉頻飛

銀漢回

當簷半落天河水

織女星

遠徑全低月樹枝

笑牽牛

詩 七夕詞

王建

銀燭秋光冷畫屏 輕羅小扇

撲流螢 秋光不照坐 牽牛織女星

玉階夜色冷如水 坐看牽牛織女星

天階夜色冷如水 坐看牽牛織女星

水ノコトク見エルトキ宮女ガヨコニ子

詩 全

明 馮琦

天空露落夜如何漫道雙

星已渡河雲がハレヤカニツユモオリ
テヨハナンドキチアラウト

見説人間方恤緯可知天上

不停按ケニヤイ人ケンカタムケル系
ヲ星ニサゲルケト天上エ

ハオリヒメガ梭ヲヤスズニ

ハタラオラセ玉ノ思ハレル

詩 全 唐 祖咏

聞女求天女更闌意味闌

ムスメタチカオリヒメニ子カヒラカケテ七タ

モツテ出テホシノカゲタウツス 向月穿

銀盤タニヲシイタヤウツニハニテ七
ニツリノ儀式ヲカザリウツキ

針易臨風整線難ハリノミ、
ズラ月カ

線トモニ七タ 不知誰得巧今且

試尋看コトモミテモミル
レカヌイハリノ手キハカアガツ

七夕手向之詩朗詠之分

憶得少年長乞巧竹竿頭

上願絲多ヨクク思フテミレバワカ
イ女トモカニイ年クホレ

二星適逢未叙別緒依々之

恨五夜將明頻驚涼風颯

颯之聲ニツノホシガタニサカニアフテ
ニ夕別レキハノグドクニ夕ウ

露應別淚珠空落雲是

殘粧髻未成七タノノアカツキノウユハホ
レノ別イナニ夕アラカ

玉かたレク落ルヤウニエルヨアク雲ハオリ姫ノ子

ミタレカミノミタケタラニ夕ツヨハヌヤウナケキマ

ニオドロキ

夕ニハ

タ

タ

七 妙藥妙術 日と十五日と

此兩日房事と戒免はしむべし
百髮と除く法 今日百合の根を

煮て煮熱し搗て新しき瓦
器に盛り屋の内は掛陰乾か

して百日置て白髮の人を
下地の白髮と悉くぬくこと

て是を塗まとい黒髮と生じて
白髮をいへど 身面の疣目と去る法

今日大豆して疣目の上と三
度ぬぐふ其大豆その人の家の

南向の屋に東より第二番
目の溜とらけ中へ種をい

そのとれた一所ふ疣も去るべし
記憶の術 今日蜘蛛一ツとりて

額乃中小はくまはくまの地をえ
つよく能くろとも忘る事なし

○近年彫刻ふさる物覚早傳と
くる昏あり甚よきと本なり

晚來 雙星之佳會世間
巧奠 音瓜之奉女兒之

事 不宜乎併待狂駕
尺牘 昏昏并註

晚來 今夕今宵此夜
辰 雙星 牛女 兩星 佳會

佳期 良夜 嘉遇 年會 世
間 万国 世上 古今 巧奠

穿針 綵縷 願縷 琴瑟
青瓜 菜萁 綠菓 女兒 婦

女 少女 妾婦 兒女子 宜

平可賞○愛憐 併待云

請來獎席 仰俟顧歩

來遊刮日期

七日毬 難波家鞆の會例

式より今日の鞠ハ七夕祭の
為小良行と云人

七京北野御手水 北野天満宮梅松院

の主今曉御杖社内陣入
て御手水を献し又神室

乃内の松風乃硯社へ小瓶
の葉をまて備へたてまつる

るれハ七夕の神詠と天神まつ
昏と玉を為くと

池坊立花 東六角堂方丈池
の坊門人集二星

へ手向して立花と興行と立花
當任職專慶法師より初

○東西本願寺立花あり又
数品の州花とて作る物あり是と

△本願寺の籠花と云ふあり
○天竜寺虫干○加茂松下虫

干○東山一心院虫干○大
徳寺虫干

大○住吉虫干神室みなく出
坂○平野大念佛虫干

江○九品佛系をぬりてはじ
戸○本所回向院大施餓鬼あり

大○石上布溜社笈渡の護る笈
和を三僧の肩小けて行いあり

逆峯入 大峯と称するハ即金
峯山也宗派ハ本山

當山の別あり本山の峯入ハ則
今日て聖護院の宮あり

逆 峯入又逆峯とも云大峯より
熊野へかけぬる又本山當山

二月

の御門主御一代一度踏みぬる
秋山より毎年の登山は皆御代
参る醍醐の聖宝僧正より始
るより委しく三月順の峯の如記

八京文珠會 仁明天皇の御宇
より始めて東寺

西寺にて行り公事根源不出
非文珠云やまよはれ見は 貴

江〇同向院佛餉施入の且主現
戸當兩益乃法事執行

九京六道参 禎賈 禎賈
日都 迎鐘 建仁寺

の南ふある六道の珍皇寺と云
寺へ参る云々今日明日諸

人此所ふまうて聖霊といふ
とて此寺の鐘とほく是を

迎鐘と云り又槇の枝と云り
より持佛堂ふく俗小聖霊

槇の葉ふのりて来りとい
つ珍皇寺本尊の茶師佛と

小野篁の像と小堂は安置と
篁此處より冥土へ通ひ道

ありとて六道と云り
非運縁ふらして来り云々

十諸 千日参 清水千日参
日方 觀世音菩薩

今日参詣せし千日ふわると
或は四万六千日ふわるとて諸

方へ参詣せり京清水江戸淺
草大坂天王寺との外諸方觀

世音昨今参詣せし河州
野崎觀音和州赤良二月堂

三十 今日杓杞の煎湯ふ浴せし
無病不老と云々雲長七葉出り

三十 魂迎 迎火 今又ふら入
の聖霊といふとて

麻母と云りて火ふ焼く是と迎
火と云へ佛家ふ説多し

〇世間ふ松と門火ふ焚く 槇の枝
とて清水と云く事ありふ

火の陽光と以て天の陽の魂と降
水の陰精とて地の陰氣魂を
呼びのぞして亡者の魂魄を
くちまらるべし蓋漢土の鬼神と
まづる式をまらるべしふりのな
らん

○唐土にも亡人の魂をひくると
て官服と着し門小出て空と
のぞき神を導き祭つたこと
又神と送つて出る事ありこれ
らの孝子の誠と云ふこと似れ
ども思ふものたゞひまに近
し君子より人佛者ふまふい
てかやうのれと云ふ事あり
色と五雜俎小見あり

○非はふ火盆の茶分や玉達 其角
狂足て歩むことと云ふは昔の
ひくはあつたなるものなる 常樂菴
三都 京○東西本願寺 灯籠
日三 拜見十五日まを

十五 中元 正月と上元と十月を
下元といふ今日と佳

節とすつた少くいふ
さよあつたざんども公式より用ひ
られどくりく日本歳時記
小見えたり

孟蘭盆 △盆會 △盆供 △盆
施餓鬼 △孟蘭盆

會の遺風とて常にも寺にて行
ふ事あるも此月の内ハ諸寺
にて専らとてあつた季とて
かるべし ○勸善彙纂 孟蘭

盆法事とありや又施餓鬼
のこゝに禪家とてハ施
食とてなり

○釋迦の弟子目蓮尊者の母地
獄に墮 餓鬼道の中にありて
食とる事を得ずよつて此日百
味の五菓を供へ十方の諸佛を
供養せしめあ人の母則ち食を

得るるに経説の意ありこの説よりして孟蘭盆會と云ふ事

始まるるにいつの孟蘭盆の梵語にして中華の語を翻訳すれば

倒懸救鬼といふ事と倒懸のささぬかかきと誅地獄の苦を

そのいふことを救ふを先祭りなり又救鬼といふ器をかきて救ふ

器なりと云ふ公事根源に出

○唐土にては今日孟蘭盆會と諸寺院とて営むる事支類聚に出

○本朝にては齊明天皇三年孟蘭盆會と設くと云り日本紀に出

其外委しくは眞俗佛事篇といふる旨も出たりあるべし

○儒家の説は今日中元なりは以て先祖と祭り秋の盛

新と告奉る事あり此ことと委しくは歳時記論と故畧と

靈祭

△聖霊祭 △聖霊棚 △聖霊棚 △十四日より人家

新棚と云ふは先祖の霊と祭るに報恩經云くは人羊小

六度来る中にも今日孟蘭盆ありといふなり祭るなり

十四日卯の刻より十六日午の刻まであるべし

△枝大豆 △枝大角豆 △芋の葉 △青瓜 △蕎麥 △青とハ ○早

米 △青かき ○茄子 △あまのの箸 △蓮の葉 △かけ索麩 △あり

の実 ○桃 ○菟 ○右の類祭供するに △此印の多し季にありあり △

あるにあらざるも心と云ふに台といふ季ふるべし

○年中行事哥合 前大納言 常へとやうの法ともなるらん

たまはるるてはぬ月なりはみ ⑩ 冷やも水真一 灵祭り 嵐雪

冥祭々も焼畑のつらう小芭蕉
棚経や声のさけい身子坊々其角

狂まがらふらふ勢まらふは冥棚へ
をわけあひいれあまう一陀入

棚経 今日其家の且那寺の
僧來りて冥まうけ前小

て經とよむ是と棚経といふ
能 棚経ぐこれ曉ふ阿闍の水 其角

鼠尾草 異名 △水掛州。穂
長くして水とそぐ

不便あれ名づく全躰熱と治
し渴と止むと本草にも見えさ

そ渴と止るゆへ 餓鬼水と手向
ふ用ゆりそぞ ○七夕の処ふも

水うけ草とつらありて稲のこえ
ととれども今日のこけり州

いそやそらの事ありと藻塩
艸ふも出又千梅子の説も同

多 藏王 せんれんくくまねんを
水むちまのほめのみふく

墓祭 京都は七月朔日頃より
十日頃まで小墓まうり

とらえ ○大坂ふい今夜亥の刻
頃より明朝へうけて十日まぶと

小橋等其外七処の墓處無縁
の者参詣とらうり是と七墓

廻まわりて云 ○唐土とも今日先祖
の墓と掃除して供養とらえ

玉筍 能 ね ね ね ね ね ね
まうりや玉筍 康吉

生身玉 △荷飯。糯米と荷
葉ふ包と吉祥蘭と

身魂と祝ふといふ
りめて上を括り贈答て生

○今△人と祭るは冥祭といふ
生る父母と養應とらふ生身魂

といふ此月公家武家とも小世
不在でり尊親を養食應とらう

事 紀事ふ出より
能 けくはまふとあまじく世の夜 友静

差替 替のせは開きて塩のひ
二尾と合して一刺と云是

と蓮の飯と親族たぐひ小ねく
こそ今日の祝儀とす

能てそて替の骨あるのこそ生身方山
利替やうけてしは夫婦つと共兼

鮮夏 △夏昏納め。今日まで
夏の終りなり。僧

徒四月十五日より夏ふこり内ハ
佛經の類杯昏写と故夏昏納と

又夏鮮と云也尚四月十五日の所
又夏の十九丁メ等見合と云

鮮夏草 夏ふこり僧夏筆
終りて終りて以て節と

束ねて且家へ送ると云也卷。一説
小吉祥中のことと云

○秋良要覽曰 唐游右の僧終りて以て
節と束て且越ふ送る是て夏鮮と云

今此州と詳ふらる小己小五部の法
身の座とる名つる吉祥と云

京 ○智恩院山門施餓鬼あり
都 ○新善光寺阿弥陀開帳

泉涌寺の内ふあり
○岩屋不動千日齋 今明日

五十 安居頭 昔八幡ふあり今
ハ上月十五日討あり

江 ○弘福寺施餓鬼。法事の
戸後相撲あり ○白金瑞聖寺

本所 羅漢寺施餓鬼
○麻布善福寺藏王権現まつり

大 ○天王寺講堂一夏の結願之
坂 ○住吉孟蘭盆會角力あり

五十 江三井寺女詣 常ハ女人禁
制の山あり

今日一日ハ女の参事とゆるす三井
寺の詠ハ委しく博物堂ふ出ど

道 ○浮御堂法會。志賀郡堅田
江 七月十五日より向十日と法會有

六十 国俗今日親戚を會して遊樂
とみす事 正月十六日ふ等し

天氣 今日の雨と洗鉢雨と名付る又來年不作の兆と

と○今夕月上る早久の晴るく月上る事遅る秋雨多し

十六日 水灯會 宇治黄檗山の僧宇治川に出で修行す

十六日 施火 送火たくりもや火
△大文字火 △妙法の火

△鳥居火 △舟形火 △京洛外乃山々まて文字の形小なると木とて

てやくなり 其間一丁二丁にも及ぶ又鹿ヶ谷大文字此筆画甚は

市原山のいの字松ヶ崎の妙法の字西山の鳥井の形西加茂の

釣舟と此外東西北處を乃山々まてあり甚見率あり事ありこれを送る火

又施火ともいふなり
送火 魂迎や聖霊と送ると河邊の麻柯と燃と云

よみ京都の俗に今日より大坂の十五日に其餘處よりて變まる

① 送る火や室宮あり大文字 其角大文字ありて流せぬ波川 三帷

京都 敵魔祭 今日と燧玉の縁日と京都本燧堂泰詣

松崎題目踊 松崎外泉寺堂の前と男

女うちまをり題目ふゆと付きて声れしくとるなり

寺開帳 ○北山村石不動念佛踊 昨今面日

江 ○燃魔祭 ○増上寺山門開戸 ○雜司ヶ谷とま

大經木流 天王寺龜井ふあり今日經木の表ふ

人の戒名法名と記し龜井の水を手向ふとふなり

新綿 内裏へ貢の綿をいへ則真綿なり

◎夫木

為家

後にもある居士のくつみけ彩紙の
はりの巻れもふれりしん

○右證哥と出とてく真綿く

後永祿の頃より初て木綿の

舶来一故證哥と時代大相

違ゆる事と見つたり昨諧の

季寄集は九月と出―三秋

不渡るといふもの藻塩草と

見たり誤りたり七月十六日又

定する事ありとや○新綿と

して九月ふとる事いなり

まきまや尚九月の條もある

と見ふる

十六日 衝突入

伊勢の山田ふありと
まうとて人の家

ふ秘藏とる物と見たりや

思ふとたり今日其家ふつと

入て見る事あり往昔の諸国

ふしありかど今絶たり○今

猶伊勢山田ふ日の九れ名号と

て圓光大師の御筆と出して

拜寺寺あり此日近辺乃

寺院も虫ぐいといとこれ突入

の餘風たりとぞ

排はと入や大らうりとつる波由

十六日 雁鳥出

四月ふ初秋より時
鳥屋ふこめ置て

七月中旬新毛と生する時時と

出と今日時と出とて藻塩草と

○貞徳曰雁鳥出揃ひる時夜

分盆の聖霊會の箸ととりて

時より出と故ふり鷹ももつふ

○さるはやくやりろくわつり包めん

今茶とせとやとらなり 定家

あなをかくぬふり守るは夜の

日次の所ねつろのふたり 定家

排抄史の片をやらじと定家 三推

十六日 妙薬

三ア虫法 庚申の日ご
く手足の爪と切す

予り集め置て今日灰小燃て水お
てのむべー扱そのち一度庚申を
守まの三尸虫を伏し押へて天上
へ到らしめ守七度庚申と守れ
ははぬふ三尸虫をくろくすけり
徐春甫が古今醫録に北帝
玄經と引てく
いやく説きさうり

六十 赤壁月

今夕ノ月ヲ云○宋ノ
元豐四年蔡子瞻

東坡居士今日赤壁ト云フ
遊ヒテ賦ラ作りタル故事ヨリ起レリ

賦 古文真宝 前赤壁賦 東坡

壬戌之歳七月既望
蘇子與客泛舟遊赤壁之下
清風徐來水波不興舉酒屬客誦明月之詩
歌窈窕之章少焉月出於東山
之上徘徊於斗牛之間下界

○既望ハ十六日ノ一ノ
日客入ト氏二舟ヲ赤壁ノフモト
ニ浮ベテアソブニ清キ風ガソヨク
トフキテ水ノ波モタヌホドナ
レハ盃ヲトリテ客人ニサレ月イ
テ、明ラカナリ窈窕トシテタラ
ヤカナリトイフ詩ヲ
ウタフト云コロナリ

七十 京 都

○壬生寺六齋念佛あり
○上京小川本法寺虫梯

八十 京 都 御靈御出

神輿今日御
枝如御出

祭りの八月十八日入日
御鎮座あり委しく八月ふ出を

八十 宗 祇 忌

俗姓ハ飯尾次郎右門
と稱ヤ人を紀州の

武家よりか世と違て蓬髪一
京師小住し生涯を雲水ふま

くを行脚せり人としてりくより
連歌乃遊人なり

文學上入忌

行状委しく博
物筮ふりごとす

諸地藏祭

今日地藏と祭る
事ハ是又扶陽

の術ふして秋の金氣を扶る人爲
地藏と祭まうとを殊ふ石像と
祭る事ハ神道ふ石とまうらふ
比論とせぬとて訣ある事なり

京○六地藏泰詣。加茂山科
都御菩薩の池。伏見鳥羽

掛村。已上六所○愛宕山千日詣
町々地藏祭とる作り物とす

○大坂うづね堀詣地藏祭分て賑じ
○河内八尾地藏會式なり近郷

より群集す廿三日廿四日大市あり
八尾のりくく市又鬻市もいふ

あたご火

撮洲池田伊丹ふり
彼地の愛宕山ふい

ろくは燈籠提灯と影く燈とて
祭る其火光近郷映す

鷹山別

鷹の親子巢と立ちり
ふりて諺ふ曰鷹と

飼ふ諏訪明神と始とん廿七
日御射山祭より鷹も詣る故

廿五日小巢を碎とせり
この事あるは論ありとハ

くハ補遺ふ明と

能家とて別とるの服外芭蕉

北信濃御射山祭 徳家作りの
御神事なり

信濃國諏訪明神此日薄とて
神殿と比々其外人家も祭り

の程ハとれとろくありとを
とみそとていふハ勅使あ

こ御持あて鷹とつり
かま草やハ巻るなりん定家

夫木尾花さく松やの草の一ひくか
まり里あり社のとさ山盛文

能ハ夜の神も為とろく日外許六

月令

此部ふの七月一ヶ月の
くゝ集えしこと

攝待

△門茶の往來の人み茶
と施と瓜つふり攝待

の事ハ仏祖純聖巖録等小出て
唐にも古く有来するこゝにて本
朝の俗稱ニありハ攝待の事
ハ常に也あはれも此月初より

廿四日頃より事あり

△松竹の茶にもそととえとれ道

燈籠

△高燈籠 △さうこ燈籠
△さうこ △船燈籠 △花

燈籠の影燈籠 △折燈籠
△廻り燈籠 △軒の燈籠 △民俗佛

事とさす月さハハ佛小供する為
設る人多く十二三日頃より此月
中より禁中の燈籠ハ十四日の
処ふるも又大坂ハハ墓處より
も十二日より十五日
まで燈籠とともす

七月十五夜月はあうたる西行

いそ我今夜の月お月とそとて

あてのふぬの人をさうさん

紙裏とあそけり灯籠の墓字ハ 扇里

踊

踊躍ハ遊戯の長さハ本
朝神代より有りのことあり

△胡々たるさそ踊る豊後

狂とやしめる踊の庭の灯籠と

とやて持も小切籠をり」近吉

花火

炮術家の餘興ハ
物より家々其藝ハ

△多る人出て種々の形とともす

△竹と木と接とあそび花火ハ半夫

△玉火入とてハ小町器様とや

△活生とて花火せんか 貞山

秋扇

△扇置 △扇とてり
△團置 △團とてり

△風とてハ納め杖の處も宗徳

△能う整て立てしとてハ扇外一流

⑤ 夫木

定家

笑をよみし手はの風多
秋の扇ををさるるひ

詩 秋扇詞

王昌齡

芙蓉不及美人粧
水殿風

來珠翠香
美人ノヨソホロシヤガ

水ノ上ヘカケツクリニシテ御殿ニ井テ玉
ノカニザレニテガハチノ香ニ匂フハウナ

却恨含情掩秋扇
空懸明

月待君王

美人ノヨソホロシヤガ
扇ヲ負ヲオホフハ何ノ

京六齋念佛
京師下加茂の東
千葉寺ハ豊大

閏の御時六齋念佛
免許の状
給せり○盆申近在の農民太鼓

鉦笛と合奏して六齋念佛として
洛中へ歩行入和州ハも處をふあり

相撲節會
△こころ使△童を
まへ△相撲是ハ三科
も云

△辻をまへ日土(漢名)角觥
とまへと互ふ力と争ふと云

古訓ふとまへとつへ俗ハ保ら
めんとつへ心の言葉なり角カ

又ハ相撲を文字ハかく
○禁中より二月三月の比諧国

小使とほふされて力者とを
み事と部領使とつへ叔相撲の

節會ハ天子も御覽ある事して
先十六七日の間ハ召仰つへ

あり廿六日ハ内取として憤鼻の上
ハ狩衣袴と着て勝負ハ廿九日

らぬとてとをいふも昔ハつへ
らつへ今諸社の祭ハ相撲と

取るとハ禁中の節會とハ幡
春日をいふ給りつへよう始まる

⑥ 年中行事哥合 女房

かこされてこころ使のつへ
々々のあふてのあつへ

⑦ 相撲節會のつへ
香西

時令

此部より七月一ヶ月乃
時侯かりて候しりす

初秋

朔日より三四日とつと
れと和歌いひらくよ

みて七月なりむまどのけき
をよとそそり

千載

寂蓮

秋の来る身もよもよぬとや
萩の風の出とろろけらん

全 初秋衣 為尹

小夜衣かきひもあくと吹けきり
もくた一条の秋にけりし

金槐 海辺初秋 鎌倉右大臣

身たちそ好くそ守ふ来いあし
吹雪の淡乃うしみの波かき

初秋の涼の色。秋と道ゆり
袖。初て涼し。かや涼。涼き。涼

の松風。今始と涼き。さふあるさ。
あむとふ。ひらく。風。あむむむ

の初風。松のあし。初秋風。あむむむ。
あむとふ。ひらく。風。あむむむ

あむとふ。ひらく。風。あむむむ。
あむとふ。ひらく。風。あむむむ

あむとふ。ひらく。風。あむむむ。
あむとふ。ひらく。風。あむむむ

あむとふ。ひらく。風。あむむむ。
あむとふ。ひらく。風。あむむむ

あむとふ。ひらく。風。あむむむ。
あむとふ。ひらく。風。あむむむ

あむとふ。ひらく。風。あむむむ。
あむとふ。ひらく。風。あむむむ

あむとふ。ひらく。風。あむむむ。
あむとふ。ひらく。風。あむむむ

あむとふ。ひらく。風。あむむむ。
あむとふ。ひらく。風。あむむむ

あむとふ。ひらく。風。あむむむ。
あむとふ。ひらく。風。あむむむ

あむとふ。ひらく。風。あむむむ。
あむとふ。ひらく。風。あむむむ

あむとふ。ひらく。風。あむむむ。
あむとふ。ひらく。風。あむむむ

あむとふ。ひらく。風。あむむむ。
あむとふ。ひらく。風。あむむむ

樹翻鳥鵲月明孤
片月孤
ツキカサシクモ元

詩 初秋詞 五言律 元鎮

且暮已凄涼
離人遠思忙
ヨホド

曉薄秋影入簷長
ニタナク衣裳ノミ
ナレバ夜アケニハ

歸心燕在梁
スキサリレ夏トハ風ノ扇
ニシタガイテウテアトモナ

女河漢正相望
ヨリスセタノ天ノ川ヲ入タテ
互ニ逢セテ待テ井ルヤウス

殘暑
△のころあつさ。七月のより
先より殘暑と云ふ

秋風の吹もつとぬま葛系
夏の夕きの程ふさふさ 有家

連暑と見ればふ衣きのひる糸巴
排 文月流る汗や退くさ 嘯慰

同くしの付ぬさゆる暑さるゑ 風斯

詩 殘暑七字對句 詩礎

暑氣尚能凌白羽
秋光早

風聲不肯入清商
夜色闌

饑暑
送 去 饑 暑 之 去 送
意入故饑暑と云 説文出

稻妻
光りあつて雷あつさ
とらふりつるびりりと

光るハ秋のそら免にわつこれハ
風雨よよはまわつて季夏甚

き湯気秋收斂の時つらて
地中小伏せんとするはら陰陽

相まぢり合て光気とわつと
季秋已後の夏の陽気收り伏

とるによりいふづまゝ一〇晴て
ひろハ風雨なる一〇秋の始曇り

詩 七

詩 七

詩 七

詩 七

詩 七

詩 七

詩 七

詩 七

詩 七

て光るははるるとし雨はなる夕
立気も長雨はなる夕

山田ありすこの庭のさうねふ
いさつらさるる娘の夕なれ 寂蓮

わつさきやこけふ光るいさつら
ふらわつら火くそそれ 兼昌

詞 通ふ。中ら。秋来る。うらる。そ
うかた。質。青は秋妻 雲。雲の

そづま。雲。露。今。今。今。今。
うらる。うらる。うらる。うらる。

涼。無常。外山。ふれ。
あまらるる。かつら。秋。

連。いさつら。いさつら。いさつら。
いさつら。いさつら。いさつら。

非。秋妻。いさつら。いさつら。
いさつら。いさつら。いさつら。

狂。いさつら。いさつら。いさつら。
いさつら。いさつら。いさつら。

詩 稻妻五字對句 同上

爛迷星少色 照天飛火鏡

晃奪月無光 横漢掣金蛇

秋初風 立秋の詞

今約の男ふ秋涼き夜衣

秋涼 秋涼一 初涼一

礼記大全馬氏曰涼風聖

天地の仁氣散どくつら 殺伐の

時侯ふるるそく 秋涼一

詩 月清 野月露涼 雅經

詞 曉ふて。秋とあつする。夕
は涼一。あつさむさふ。夕

の風。風の春。吹まらる。夕

入。風々る。あきり初り。あまのたれとあられそふ

①連 涼いそふれいほはけの風 涼哉

②非 盆おの涼きいふの類引宗奥

詩 秋涼七字對句 詩礎

濯 残暑氣朝来雨 三伏冬

助 我秋声夜半風 一凉新

初 嵐 ① 初慕風。初秋の未よ

② 嵐といふ○嵐と計ハ連能ハハ

雜るり△初嵐として秋未定む

多ことハ春夏ハ陽氣上昇とある

時節故吹風もあざやあり

秋より陰ハ次第なる故吹風

も秋冬ハあらし故ハ初の字

を添て秋の季とす。昔嵐ハ夏

③ 夫木 慈圓

秋風ハ萩の上葉もあはれて

あらしかうつらふそあき

詞 嵐ふる。れとあふ。群分。い

く吹。あきき。吹ま。ちな

びく。つらきあま。さま。

④ 連 好やとゆふと吹守初嵐 末碩

あやうたる葉あひくやと嵐 左秋

⑤ 非 秋入るま寂らす嵐の秋さし保久

冷 ① 涼いとつふよりの重く

② 寒いとつふよりのあらし

③ 雪玉集 實隆

か 衣跡分のなきの胡きむは

秋 冷いきと夜とそとあふ

⑥ 非 ささきと川の鼓のたきあひ 芭蕉

秋 色 ① 草木山川も秋色を

② あうたあらし

③ 夜ふかしの秋の色も

④ 秋の色も

⑤ 秋の色も

⑥ 秋の色も

⑦ 秋の色も

⑧ 秋の色も

⑨ 秋の色も

⑩ 秋の色も

⑪ 秋の色も

⑫ 秋の色も

⑬ 秋の色も

⑭ 秋の色も

二百十日 立春より二百十日め

をいへり今日風の

詩心

と恐るの二百十日の早稲の花
さうり二百廿日の中稲二百卅日ハ
晩播の花盛りニ是より後ハ
花らり実ふるらゆへ風吹ても
稲又さうりず稲の花ハ中ハ水
のどけ白さりのあり是米又
なりく風ふけハ此水と吹らる
とふより米出来さるなり 雨
ふレハ此水を花よてはむひ上
る風多レてもさほど害をさる
さす雨なるの大風を恐るく
ハ東北より吹を大坂まで上げと
ハ此風吹流のまひえて去け
にさる西より大風を吹り守
より是とさるハ○東南の風と
いなこ或いせちちと云あて
らるれども是もさつものれハ
大志けふさるさへて東より吹
風の雨はるらるささい西より大
るを吹り守雨又さるハさる

との事なり大形の雨より
ておさるなり○西北より吹と
あさせといふて日私より西南と
沖氣といふ曇りてむくもれ
ども日和つるをりのへさるさとも
りさるり出せハ此日和ハ長さも
のまて西より晴てくらかく替
ハ沖より雲とつさのやして雨
ふるらる此風吹はけハ日和電
曇りハ雨もよかく長くつら
りの○申酉の方より吹とま
せといふ日和つてとよ○東よ
り吹とて西より吹風はこつと
とつハ風あり此風ハ地へさる
つて其所より風次第小日
ささるらる大風より縮と
損ざる事甚し雲ありて北
風の雨をほささるる新ふも秋
北とよさるり秋ハ金さるり北ハ
水ハ金生水の理とて雨を生ど

七屋 草栞
さへ若くはとも夜晴
て北風の日和より

草木
七月の草木を集むる内の
とくは八月の草木が又秋
三月にもさるるのなり

楓
△青楓の本名と雞冠木と
和名とわけてし事ハ蛙の
手に似たる葉なるゆへ各づ
つらなり種類はな

異名 丹楓。紅楓。霜楓。斑錦。
○和國乃楓と唐土の楓と
大小わたり異なり葉ハ三角あ
らと兩様なりび出る

唐 和国京都
楓 高雄楓圖

○いいでひきだ。そのま
ゆみ。これ類紅葉とるし
バ九月なり入りく九月草
木のさる後ハ

○万葉 茂草不日なる楓なる毎ふ
いもと。つて若ぬ日ハ

○非 詠田川おれ多きなり青楓 錦藤
まことあめぬ多産るや楓の子若室

風からぬさぬあらし雲楓 とき
若楓をばさく紅葉う非 五風

○狂 葉もさい珍小あめ竜田ふ
秋えて若入ちちへ去ぬ 貞室

楸
キサケケの畧ハ又雷電桐
ともいふ又かきさるきけ

ともいふ此木雷除くもる故
○さげのてく長一尺許の葉

枝の間ハ垂る皮鱗のて
異名 木玉。實名 楸。梓。椅

榎。るどく少一ツかかれ種
類多し。こひきだ。そうひき

赤芽栢。あづさ。河原ひきだ。
等諸家の説多し入りくハ

補遺は出さへ
○夫木 うち玉の夜の文ハ楸也
きよた河原もさるる赤人

○非 取くそ人ともいふ楸多馬尉

柞 栢の属なり実ハ渋クシ
テ食マナクハト暮秋ハ

紅葉トシトモ色トナリ
奇ナル色トモナリトモナリ

⑤ 万葉 小川の石田小の女を系
トシクヤ君のふらゆらん 宇合

⑥ 連 ちりぬらう栢葉色なる栢葉結巴
⑦ 非 栢葉ハ栢の男のそふらり 提河

檀 文字たうなる檀木ハ
唐土トモシ沈香或ハ白

檀ノ類トモ日本ハあるトモ
今ハマユモトウノハあり

⑧ 枝 夫の羽のこた物あり
木の種類トモ其羽なるトモ

⑨ 陸奥トモ紙ノ作ノ物此木ハ
⑩ 表のひと表匠トモ色トナリ

⑪ 檀 宋名黄檀。天子の御袍
これトモ以テ染ム故トモ黄檀

深トモ三月ハ白花トモ開キ秋
トモ赤紅葉トモ漆ノ類トモ

木槿 日及。舜草。
花ハ朝ハ咲

⑫ 夕小 隙ハ故小槿花トモ
トモ今非諧者添槿ト

⑬ 夕小 槿トモ混セリハ
夕小ハ槿トモ混セリハ

⑭ 夕小 槿トモ混セリハ
夕小ハ槿トモ混セリハ

⑮ 夕小 槿トモ混セリハ
夕小ハ槿トモ混セリハ

⑯ 夕小 槿トモ混セリハ
夕小ハ槿トモ混セリハ

⑰ 夕小 槿トモ混セリハ
夕小ハ槿トモ混セリハ

⑱ 夕小 槿トモ混セリハ
夕小ハ槿トモ混セリハ

⑲ 夕小 槿トモ混セリハ
夕小ハ槿トモ混セリハ

朝貞 近世数種の珍花トモ出
⑳ 朝貞 一名假君子。朝花ハ

辰の時ハ赤ハ蔓艸トモ

浦風不浪や芳々らん終夜
さひぬ石の物色乃こそ夏
頭季
詞花の物色。赤の物色。ふぶの
の炬籠。仇るりたれ。一時。夕
かきまゝるゑ。赤の物色。赤
むとふかり。さかりなむさき。
赤なりひもさ。

連いふ日ひ々々き物虫の鏡宗宗砌
非非葉つふふれれてていい水水千千代
葬のせのくく嘆嘆てて浮浮世世かか常常救
狂の魚魚のあふふななくく一一人人同同也
赤あくく命命のも守守物物おおここ一一道

秋海棠



異名 爛腸
草。煎服

花。り。海棠。い。つ。名。海外より
来。故。名。つ。く

玄及

會及。五味子。莖を
美男くくくととくく堂堂上上方

よ。今。も。水。も。浸。し。孫。ま。う。せ。て
髪。と。結。ひ。の。く。地下。及。ひ。民間

元文寛保の頃まで此製
残る賢附油さくふさうて

より玄及と用る人あり只雲乃
上のもさう花は三月実は七月入

桔梗

△さちかき。い。ま。し。へ。ま
蠅のひらきとさう

桔梗の花咲くはるをさく千代
桔梗の色老子のほのむかひ寒竹

狂。終。て。これ。桔。梗。の。染。物。や
色。あ。さ。め。と。つ。わ。い。え。さ。う。栗。門

澤桔梗

葉ハ山丹に似て少し
短く又又桔梗のおと

く大くして花碧なり根白く沢
中小生し長く生さるゑ又浮

蕎花も沢桔梗とつら
非。沢。桔。梗。花。の。色。を。染。る。茶。雷

蘭

京師の俗にシラと称を
野ある物ありといふ

の葉は似て切又あり薄葉の
花はひくく香は葉あり蘭

三種の異あり漢土の古蘭と

つりの今の茶蘭あり和の

藤袴と称する物の本朝の昔

より蘭といふ物と和漢近世

蘭と称する物の建蘭あり

次あり

秀古今 敏行

何人かまきりやまきり

夫木 匡房

かきり世の糸糸のゆきま

子代の秋まを白くをま

非 蟬丸く中と場す茶支浪

後袴のりまらぬとせ声可

狂 せまれとままはくとやらん

白ひもえまきと後とるぬ小貞徳

建蘭 数十品あり其佳あり

△タタラ 一の價大貴一葉長

く麥門冬小似て一二尺花の莖と

抽で教花開く蜂小似あり

非 茶のや茶抜削て呈眼る巴靜

さる若とまき茶を茶令よ才九

狂 蜂小似く尾てまきれたるれい

女郎花



小翫びり

ありこの根醬のくまうさる香

あり花の人のよく知るあり哥

いよむいそ女小たへて戀哥

小尤多一〇俗敗醬と混ぜり

偶よく似たりと以て誤まら敗

醬の弄花家羽衣と云花へ

古今 僧正遍照

名小多そおらうらそ女郎花

これあふた人まかろるま

〇此く遍照る奈良へまら

まらるとれれとこひとそま

まらとそまよまら

千哉 女郎花隨風 雅兼

そまらへりかひとそまら風の

吹来り未もるのうきま

連とくはしとてのさる人いほ 節巴

非ひるくくはあややめらむ芭蕉

修ひまどりては(あやあまの)后里

茶の花 ともは少一似

う花白一是と男

べーとつるこ 覺東は(か)万葉

小男べーるどいふやうなる哥あ

どもこれとてよめる哥ともき

くんと又茶の字義もさごりや

ず按より小女郎花小白と花も

あまはそれととこべーとつる

うや爰ふ先俗説ととごり

茶の花よあくつる

非おろやおろや男べー百外

男べーとてもひやれる地ふ共十

狂男(一)とては(二)似もせて

いふる人の原あうや貞史

仙翁花 (一名)紅梅草(一)出

花の形はんびふ似う

非 藤草 かのけ細梅まのたをい

ころのふともうせつるう那

非 仏教たまおれのゆま(一)入安

観音 州 州 須知(一)吉

祥蘭と登(一)う

花はうす 穂(一)とるす

非 おく(一)たのめくそ観(一)珠明

翁草 初春(一)苗と

生(一)葉(一)麦

門冬(一)似て甚(一)白く白髪(一)の如

故(一)号(一)花秋(一)三(一)文(一)會(一)出

散木集 俊頼

乃の辺の人(一)なる(一)お(一)く(一)

お(一)く(一)り(一)れ(一)さ(一)る(一)ひ(一)き(一)と(一)そ(一)す(一)る

非 枝(一)の(一)枕(一)は(一)ぬ(一)る(一)お(一)ま(一) 三(一)惟

弟切草 漢名(一)劉(一)奇(一)奴(一)州(一)と(一)い(一)ふ



師草 青(一)茶(一)花(一)小(一)黄(一)る(一)り(一)三

稜(一)の(一)莢(一)と(一)い(一)と(一)び(一)中(一)小(一)る(一)る(一)子

あり○青茶又茶師草と名づくる此草金瘡の茶なる故らう劉奇奴ふくれと云れども茶能いふれ花葉異なり

哥 鷹百首 定家

秋の神ふまは松のまら茶 宛つてふ香やそねるらん

非 さいさよええうのまら茶 五風

妙茶 疝氣より陰干にしてせふ 用也○血を切るとすよ此葉と

陰干して粉や油をせう付る

○此葉とあをれば汁出さるれ一

切の金瘡又腫らんふつけ

てとまりど妙なり

益母草 一名荒蔚。莖胡麻に似て葉ハ麻ニ

似たり節々小花と開く実あり婦人の病に功あり故に益母といふ目と明らかる精を

盗と故に又とすまきの名あり

秋 ○波木△系秋△白秋△小秋 △古枝州 葳五△鹿鳴州 和名△初見州 葳五 名庭見州 葳玉月見州 葳塩野守州 同

冬莖かれにして春葉を生じると木秋といふ。冬葉莖ともふれて春

新しき苗を生じると小秋と云 本和

△系秋の花紅なり△白秋は志ろき

花多るべし 奥州宮城野小秋多

生ふる山なり其内は白花あり又

白紫咲きけるもありとぞ其外詞

の所は△印あるハ季は用也べし

哥 續千載 我社の萩もよみ此ゆえに

とよみかたは萩とかなん 俊成

玉葉云女ふりかゝの萩の花のえふ

玉とくさるる秋の萩とかな 為家

藻塩 世にささき世に死を野に料

ありし萩神をけりしつゝなる

葳五△城のまもさある古枝ま

るの萩も花は咲たり 西行

七月 草木

七又四十三

ハ野菊の黄もろがごとし

〔異名〕 滴露路金。野油花

野菊 銀稗蒿又野粉團と
ハトク菜に似て莖か

ハ 救荒本草ニ出 又春ハトク菜と

ハ 小月の秋花と云 野菊と云

やいと花 葉女蔓に似て花を
筒ぎれなりやなり

ハ 花は白くさきり小花いろ

白く内をこし紅し小思この

これの莖つきのかき松上あり

て身にありて灸のまゝとさる

ハ 似たりゆへ名づく

〔非〕 これもス父母の恩あるやと云 立圃

曼珠沙花 〔和名〕 天蓋花。燈
籠花。〔異名〕 石蒜

〔異名〕 烏蒜。老鴉蒜。水麻。○

蒜頭州。漢。酸。一枝箭。葉

ハ 根のむきそりけし花ハ莖と

ハ 似たりて五六葉いろとさる

ハ 似たりとむきまがごとし

〔非〕 もろいもさよハあはれ念を其十

常山花 葉ハ梓樹に似て
いろく甚くこし

ハ 六月花を開く七月ハ此虫

とさるなり常山ハ苗乃名

蜀漆ハ根の名なり

〔非〕 目そしハあふの花もろさし 李波

頰桐 〇ひまり。葉大さき五
六寸ありて皺あり

〔和名〕 ぬま。かきま

葛麻子 〇かきく

〔和名〕 ぬま。かきま

澁柳 澁柳ハあり。澁取
法又澁紙の仕中ハ

ハ 日本歳時記ハ出せり

〔非〕 澁とやハ名多しと云ん岩翁

茗荷花 七八月根のかきりふ
子と生じ即花あり

〔異名〕 王金。葉ハ芭

鬱金花 蕉に似たり花白

質紅之深シロ色シロ小コのり此根より

花ハ多クこのさうふ似て甚大なり
○非之を瓜ウリにシるルをシるルはハ鬼キ也
○うウんン多タはハはハ愧クらラいイ海ウミ言コト水

薏苡 仁ニの穀コのぶブ一ヒト粥シユと
とけトくクぬヌまマてテ念ネン珠シュとトすス也
いイりリこの名あり実ミ小コより

て季キとトせセり
○非今イマ糸イトりリ七シチ菴アンとトまマにニ菴アン粥シユ 玉タマ瑞

蒲萄 ○異名蒲桃 草龍珠
北国キタクニ小コくクはハ蔓マン小

て棚テと延ヒぶ実ミと以モて季キとす
二種ニシユあり一種ヒトシユハ多タびビくクくクと云

紫葛 多タびビくクくクハ山ヤマ葡萄ブドウと
いイふフのノさサりリ袍ホのノまマ

び色ヒイロハ此ココのノ分ブン以モて深フカくク物
るルりリとトをオ但タしシ葡萄ブドウハ実ミ乃

名ナるルりリ紫ムラサキ葛カハ樹ツの名ナ一
種ヒトシユの別ワケ名ナ蔓マン葛カとトすス。

エビエビとトハ 醉サケくクくクたタの
実ミの色イロ小コはハきキくクくクり

○非窓マダ日ヒとトハ 柳ヤナギハあアのノくクるルぬヌくクくク野ノ坂

道ミチのノ実ミハハ後ノチハハ生ナれレくク葡萄ブドウハ地チ高

詩 全七字對句 詩礎

雨アメ来キ枝エ上ノ清スミ泉イハレ沾ツ 珠シユ顆カ重オモシ

露ツユ重オモシ稍シヤウ頭トウ紫ムラサキ玉タマ垂タリ 水スイ晶セイ明メイ

妙術 蒲萄ブドウとト壘ウの根ネ乃ハ切キりリぬヌれレ

栽カてテ春ハル小コくクりリ其ソノ末マタのノ木キ小コ穴アナとト一

年トシとト経ケてテ枝エふフりリ長ナガくクるルりリて

東ヒガシのノ穴アナ一ヒトもモ小コ満マンるルるルとトぬヌぶブくクの

根ネとト切キりリぬヌれレくク木キのノ根ネ木キと

桃モモ子コ ○異名仙菓 蟠パン実ミ 三さん偷トウ
碧ヒキ桃モモ 白ハク桃モモ
洛陽路 種類

七月 草木

○早桃五月の毛桃山中の冬桃十月の
○霜桃上これ西王母の桃の類

日本に在るは此外種類多し
多し又異品ありのり大なる
一抱にも及ぶりのあり

○非桃の實の味もさるる外蓮二
糊つる桃の老又やた老又煮一
程挑尻ふりて吹くちるもよ
こゝろのりらこそこれ貞柳

詩 桃子五字對句

顆々粧霞媚 王母千年実

團々帶露肥 秦人幾代孫

詩 事類賦

○果實多品惟桃可佳夫々其
色灼々其華 詩經ノ語ニテ花ノ見
ク多モノ多シト云トモ
モハ其中ノ多クト云トモ

ナリトハ嫦娥ノ月ニ入タル故事ナリ壽ヲ
ニストハ東方朔ガモ、ヲヌスニタル故事入
○或制而祛邪 桃ヲ及テ邪鬼ヲサルト云
故事和漢トモニ多シ
○或美后妃之德 女トクヲバヲ桃ニ比シ
テ云故多クアリ
○或報瓊瑤之華 玉ノカハリニ桃ヲヤラ
フト云フ故事アリ
皆詩經ノ故事ナリ

桃子 漢武帝ノ時東郡
三偷 ヨリ短人ヲ缺ス帝
東方朔ヲ呼ニテ見セシム短人方朔
ヲ見テ曰王母ガ桃ヲタエテ三千
歲ニ一度實ラムスブ此人其桃ヲ
三度偷メリト云ヘリ 漢武故事出

青花 山海經ニ曰磅礴山ハ扶
桑ヲ去ル一五万里日ノ及
ガハル処ニテ其地寒シ桃ノ樹アリ千
圓其花青黒シ石歳ニ一度ミノル

木瓜實 異名 鐵脚梨。樹
蜀。是海さくくハ
リノ種類多ク實ハ大体ニ似
テ又多くあるものハ檀子ト

三ノコニ

七片 草花
草木瓜より林檎の
六くろくも味酸

槐花 六月末より七月小至まで
黄花と開くより赤む

の木は種類よくて葉の夜の眠るく
唐土のいれへ槐を植て其下に
て訟を聴くと云日本はて
其遺風とあとい大臣の別名
と槐門とよみ大綱言を亜槐
と呼ぶなり

詩 槐花五字對句

畫影籠青禁 縣一蟠根出

秋香拂紫宸 城荒細葉殘

槐之 植三槐 華文類聚二曰王
晉公祐手ツカラ三

槐ヲ庭ニウエテ曰吾子孫カナラ
ズ三公トナルモノアラントイヘリ

果シテ然リ天下三槐ノ王氏
トハイハリ

蓮子飛 蓮の子と荷とよみ
房の中ふあり此こ

非 蓮子飛んで水中小入
在 極ホもわくめめてまき星と
くるいて人も死ふ多うなり 宗惠

詩 蓮子詞 東坡

露復含烟 三トリイロノ玉ガ蜂
テミレハツユガコツテ又 玻瓈盆面水漿底

醉嚼新蓮一百圓 味ノ汁ノソコニ

アルガコトク見ユルヲ醉
テ百ホドモカエタリト

刀豆 一名 挾斂豆。葛豆。
唐ハ赤一日本ハ白一

葵 葵をこけごとく蔓草なり

非 抱さひて位むる豆の垣根 宋因

夕顔實 中ノ瓜ノ類。瓠。壺盧。ハコ。花白。

奇 未 夕瓜のこま入むはさるを社
こて浮世のこもあはる内を

非 瓢箪 ハコ 同く瓜類と云ふ故然
酒をふくむけあり生 瓢箪考

青瓢箪 アサギ 右小抄ナリ
生ありあご乃

乃乃面色ふたふたり

狂 病む類と云瓢箪と云ふハ
左 病瘧病をも有ハ一負左

西瓜 スイカ 此種ハ西域より傳
へて唐土にも漸

五代の時より始まり日本の慶
安中黄檗隱元入朝のとき

種と携へ来て初めてみ
されようへり寒国に生です

非 出木の口紅にむる瓜ハ支考
晴明小法今やせよハ西瓜外宗因

狂 赤赤なるそいあはるそ白白
西丸身とらふるひえたり 海音

妙菜 衣服小なごのやふれ
つとらふ瓜落とふり

何 ナニ 近世畿内小種を
うへる味西瓜

似て美るる瓜皮のうへは
あり葉ハ蓮の葉にがくハ莖

中空ありて蜀葵のこ

瓜 ウリ 瓜又非瓜人の後ま基中
ハ瓜つらるる名と云ふハ西行

棗 ササギ 壺束ハ上まの要束ハ大
て腰細ハ小

味酸 アジ 此仁と菜物とや漢土
ハ数品あり本邦に少

非 針 イボ 穿ふ針ハ率ハ露州
ハ瓜を穿く瓜を穿く瓜を穿く

狂 ちへて交はるる瓜の皮を
る瓜やとていふ瓜つらる

瓜 ウリ 瓜つらるる瓜つらるる瓜つらるる

早稲 △早田の稲 △こまこま

○こやくみのるのこ
○万葉 石上小波のこたせひてこも
繩ふふくしてせりけくわん

能 こそけい多やせの整いこより蓮二
つぼの香や蟹をこけん波の乃 全

室の早稲 頭昭の袖中抄よ
日ひろハ早苗なり

志うれいむろれもこもこもこむ
ろのこやせもこもこむしん

○堀河百首 田舎はるまをこけい
老ふなりもけいこもけい

生類 七月の生類と集むつる
○如北平の八月又九
月にも用ひるのなり

初鷹狩 △小鷹狩 △初鷹狩
△初鷹のむしり公

郷の鷹狩り冬ハ大鷹にて
大鳥ととも秋ハ小鳥狩り小

鷹とけいふ。雑談抄小たけい
雀鷓。雀賊。小隼。鶺鴒を

かりの貞徳説は鳥屋出の
鷹と居て初めて狩るといふ
と初鷹といふも同し

○夫木 順徳院

着たうのまやのあざぢをこめて
おのまもかへか好乃将人

とやふるをこもこもこあつの
狩りかへんけいもつ衣笠

詞 ところかり。おまぎらひ。かひる。
落を。こかろ。つてかまらう。

屋ととも川。とけいなり。牙
より。もね。ひたき。うつ

とる。常々たの秋ハ秋の地
義登州の花をよこ合と

連 なるをけいの秋のあはれ因桂
あすもんはけいの小鷹なり 宗祇

能 掉るそをけいハの鳥屋立甫
お奥のは初めはあんな初後白

狂 それてまこそれてまこ
あせるとりれ初かり夢 木葉

鷹打 山中かて鷹と捕を

鷹打と云そのたを

おもしろくといふの多し伊豫の

荒鷹 鷹と捕ていまご

人よりざるを云則

鳥屋勝 四月より羽毛と替

毛と元のぶくつへるとい片

鳥屋とも片鶺鴒とも云二年め

と両鳥屋とも兩鶺鴒とも云三年

毛全くとそまわり勢よれを

鳥屋勝といつり三才金出

鳩吹 手と口あてて鳩のこゑ

と真似してたゞとる

非 鳩ふらふとふらふと

秋蛙 秋も鳴く蛙 非 人教

狂 杖のわが手不きかひく

水ふるく埴の杖乃夕る是負柳

秋蛭 非 凡 凡 凡 凡 凡 凡

秋蚊 非 蚊 蚊 蚊 蚊 蚊 蚊

秋螢 針鹿箱根をの

小螢あり併るがう冷気俄

蚊 蚊 蚊 蚊 蚊 蚊 蚊 蚊

等よりあるす懸て秋への

晋ゆく雲雲の上までいへく

秋風ふくく厚ふつを業平

非 牙退や雲も杖の天の乃入重

連 日今じお終りて 塵秋の 赤宵相
非 日今じや終りて 塵秋の 赤宵相

秋胡蝶 あきのてん 毛虫 或ハ 芋虫 いもむし
の化 くわ 一 いつ なるものなり

哥 源氏 初その 秋蝶と云ふや 小春の
秋の 川に びり びり とうとうと くるらん

非 蝶と云ふ今 せむし 秋の 色 東風
素園の 花ふかり ぬや 秋の 色 連三

狂 こととも あり けふも せむし 秋の 葉 細
あやうく 蝶の 色 あり する 様 質

田畑虫送 たのけむり つかう 田蝗害と云ふと
いふ 送る こと あり

とら 時 農夫 大なる けむり の けむり
つ々 鐘 鼓と 鳴らして 野外 へ

送る 又ハ 松明と 照らして 田中
呼りも あり けむり 陰陽 寮 へ

余 ども 船岡山 へ ます けむり あり
けむり 事 あり

蜻蛉 やんま 雨色のアキツバ △胡蝶 やんま
△とん 不 △ニボ △トニボ △アキツムシ

△赤卒 △赤んぼ あかひら あり あり
○色やんま ○とん ども 大小 ありて

色と 異ふ する の こと あり やんま へ
古言 小エムハ けむり 通音 あり

かげろふ 元陽炎 の 名 あり この
けむり 水辺 の 日 かけ 飛ぶ けむり あり

陽炎 の 名 けむり あり けむり あり
秋の けむり と けむり 名 あり 古

名 あり 次 へ 故事 あり
○胡蝶 俗 へ アキツムシ 大 ありて

其 紺 あり けむり の 紺 と 名 づく 俗
カ子ツケトニボ と けむり あり

○古哥 あり けむり あり けむり あり
あり 一ツハ 春 乃 新 けむり あり 事 一ツ

と こと けむり の 事 あり
△ 後撰 秋は けむり の こと あり けむり あり

非 けむり あり けむり あり けむり あり
狂 けむり あり けむり あり けむり あり
川 けむり あり けむり あり けむり あり

全七字對句

詩礎

風定織枝堪綴足

相逐戲

雨來密葉好藏身

關高飛

蜻蛉

日本紀神武紀卅

故事

一年夏四月巡幸

蜻蛉

屬帖

日本紀神武紀卅

故事

一年夏四月巡幸

あめひ 腸上の 隙間に登る國

の 狀と 望まをひての なまこく

あまゆえ やよひ 國と 獲り内

ゆいの ままに 國と つとも 猶蜻蛉の

聲 咕ぎが たとくと ありこれより

日本と 始を 秋津國と つら

の ともを 此ひし 尻よりひけて

ともし 飛ぶ けつこ

虫 虫の音 虫の聲 虫の題

小ハ松虫まきくくそのさい

次記す分ハつせもとも

奇 夫木

花山院

つらり合せかく虫のちかあまらけ

ひまもそまらむ秋のあつへり

家集 月前開虫 清輔

あもあや小まらむを雲月を小

まをまらむを虫はれまらむ

新後撰 野虫 為氏

雨杖のつとを指してまらむくを

つとをハの人のあはれひん

龜山 庵虫 為世

あまらむをまのつらりけつたつを

指すまらむを松ののまらむ

詞 まらむ。まらむのまらむ。まらむ。

あまらむをまらむ。まらむ。まらむ。

の 孫あけを 蓬を みたるを。まらむが

若 浅第、あまらむを。庭のあまらむ。

あまらむを。あまらむを。あまらむを。

まらむ。まらむ。まらむ。まらむ。

まらむ。まらむ。まらむ。まらむ。

まらむ。まらむ。まらむ。まらむ。

まらむ。まらむ。まらむ。まらむ。

まらむ。まらむ。まらむ。まらむ。

まらむ。まらむ。まらむ。まらむ。

不似とも故も名く。松虫。鈴虫。響虫の三種人々其音と尤賞す

山家集 家隆
ある人ふれたのゆゑされの
考いてとらる響ひより那

月鈴虫
○金鈴虫とも云又月
鈴見とも云色黒く少

黄く音ハリシクと鳴

哥 未きととらるる響ひより那
神禾の蟲けとてひの声 範光

詞 ありて神あつふ
連 於これ声やかれの衆のる 紹巴

松虫  蛸とも云其音ハ
千舌とと鳴く

散木 俊頼
夕されの世へは物をとらるるん
松虫をよとてあまらうたり

行 ありて虫。むつじと。又ひま
ても。松虫ハまのつとつとつとつと
△人もつと虫。れまらたまを考ひたり

連 松虫も風ふりりりりかたの声 宗祇
非 松虫ハ聲とてやせの如くは友静

○ま虫松虫の異名とて一虫
たりもつとい又松虫ハ声清亮又

してイ、とつとつ如く松の音ハ
似て松虫とつとつとつとつ。謡曲

野の宮の誰まら虫の音と
んくとして風范々々うくく

ハ松虫ハまのつとつとつとつ又

狂 たるるる。素湯のらげれあま
つんくとなつ松虫の声貞徳

右の外説多し上は圖まらつ所ハ

畿内とて人家籠の内ハ養人
処ハ尚國々水土ハよめて大同小異有

蟋蟀  一名沙雞。名丸
をてつ虫のちる虫

其音キリクスと鳴く二声三声ハ
舌つくとらるる也 黍一ハ七ナ二テ

順和名鈔曰蟋蟀一名蜚。木
里木里須とつと加茂真淵の説

又ハ蟋蟀ハ万葉小

哥 秋風之寒吹奈倍吾屋前
之深第之本蟋蟀鳴毛

とよしつるふよしの和名抄ハ蟋

蟀とさうくすとよしたるハ誤り

にてくやろごとよむべきはしつろ

夫木 惠慶

庭裏ハつらさめうとまうくす

かくおろまけハ秋ハこふなり

雪玉 早蛩鳴復歌 為氏

しのくれハ初秋風のさうくま

まうこ床まきとさめハあし

詞 心落。秋まの夜。枕のり。く

このはらう。はくこせとまう

連 さらくすねハあまのあまの山背拍

非 常灯ヤ登あてふさうくす嵐

促織 (一名) 斯螽。翅織
俗ハまうくとまあり

蟋蟀もまうくとまあり此斯

冬蝻もまうくとまあり蟋蟀鳴声

まうとまう如くキリくまうとま

音ハ依て名づく此斯螽ハ狀乃

俯仰ハよつて名つらう

金葉 さうまけまうとまうハ

まうとまうハれまうまうハ為氏

詞 舌のあまと織る。まう織る母の

まうとまう。まうとまう。萩のみま

まうのたてあのみま。織る。山の移

まうとまう (一名) 蜻蛉。形蝗ハ似

て光あり翅角あり夏

生ハ秋ふつて鳴入 三ノ四ノ

蜻蛉。古保呂木なりハ 順和名

千梅の説ハいふとハならまうと云

ハならまうと云ハれハまうと云

ハならまうと云ハれハまうと云

電馬 狀ハ促織ハ似て稍小ハ

脚長ク好んで電の傍ハ

鳴故ハ電馬ト云 漢也 電雞ハ好

筆の人ハ是トキリクスト考云ハ誤

非 打ハハハハハハハハハハハハ

桶の梅ハハハハハハハハハハハ

○さうくき。こころ。こころ。の三虫同類。和漢とも弁別。詩經。五月斯。蠶動。股六月。莎雞。振羽。七月。野。八月。在宇。九月。在戶。十月。蟋蟀。入我。牀下。とあり。朱子注。又三虫一物。あつて時々変化して其名と異ふとあり。

△**稻虫** 八月。稻の。牙小委。一を。あつて。季の。多。多。七月。と

△**阜螽** 此虫。性不。嫉。雄。虫。数。虫。二つ。ひ。一。母。百。子。故。小。五。百。子。云

又此虫。一。夏。小。子。と。百。生。ら。故。小。五。百。子。云。能。門。の。若。く。追。出。と。い。ふ。虫。也

△**樵虫** 能。樵。虫。乃。是。一。葉。や。葉。小。舟。友。静

△**蓑虫鳴** 漢名。蓑衣虫。結。草虫。壁。債虫。木。螺。○。その。心。一。と。い。う。以。て。と

此。秋。清。少。納。言。詞。風。の。音。聞。知。り。て。八。月。を。う。い。ふ。ま。は。父。と。く。と。そ。る。げ。小。思。く。つ。み。と。あ。り。ま。う。と。う。う。

○**か** 野。う。え。ね。の。か。も。あ。げ。し。て。秋。風。の。あ。む。み。の。ゆ。の。声。寂。遠。

詞。そ。る。本。の。系。秋。月。の。の。む。能。こ。の。虫。は。さ。と。あ。ら。ま。の。名。也。

△**馬追虫** 田家。之。て。人。家。近。く。鳴。声。牛。馬。と。追。入。が。ば。

△**稻脊** 能。頭。又。わ。う。の。虫。と。い。ふ。又



と。く。も。い。ふ。り。古。名。イ。子。子。コ。ロ。形。緑。色。と。頭。尖。り。社。人。の。鳥。帽。子。着。ら。る。似。た。い。俗。名。祿。宜。と。い。ふ。又。兩。足。の。高。さ。と。い。し。身。と。伸。し。て。稻。と。は。く。が。如。く。動。か。り。ゆ。へ。ま。い。ひ。さ。虫。と。い。ふ。

△**藻鳴虫** △藻。住。虫。の。音。能。多。く。よ

初家のあつこのえんも夕けよ
夜うらうらしく此月うら

よ野辺は出て稲葉露ま
うはあひ縮の穂の出で青

て風はそよけき遠く
のぞめ平々として面白

破		軍		方		向	
戌の方	夜九ツ	丑の方	朝六ツ	辰の方	昼九ツ	未の方	暮六ツ
亥の方	夜八ツ	寅の方	朝五ツ	巳の方	昼八ツ	申の方	夜五ツ
子の方	夜七ツ	卯の方	朝四ツ	午の方	昼七ツ	酉の方	夜四ツ

時刻 未日申日未刻申刻事
目と不用のへう

方角 家普請他行東北の
方小向しては南大凶之

天氣占候 卯の日三ツあれ
ハ稲よく熟す

月の内小虹あきば米とらめ
野菜もでもらうか

衣服式 帷子を着るる當月
の式之袴ハ鶉色なり

萩重 裏薄紫 花薄 白
裏うすまれいろなり

女衣服 白帷子を着るる式
るり上臈ハ白あびの

養生 夜漸くいやりなり
衣と厚く涼風よ

やぶらぐ草なるれ影の間ハ
膝理ひらけ表気うすくして

風小感トヤと一或ハ感冒傷
寒痰嗽喘急の病やらるる

慎んてこれとさへ
此北のすびの根とらやび

刻とせん凍瘡を洗をよ

このせうし
ろくろが歌

いまいづう
あしけりし

能・老しけ
長き手とまひす

美味
たこ細切
せうじけ

生かつかうせ
あしけりし

たのうげ
あそんこり
あしけりし

あしけりし
あしけりし

煮の
あしけりし

生かつかうせ
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

和會物
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

吸物
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

精進
あしけりし

あしけりし
あしけりし

汁
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

贈
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

あしけりし
あしけりし

清汁
あしけりし

あしけりし
あしけりし

